

学生海外調査研究	
シャンゼリゼ・バレエ団に関する文献収集、映像確認	
深澤 南土実	
比較社会文化学専攻	
期間	2011 年 9 月 19 日～2011 年 9 月 30 日
場所	フランス
施設	パリ・オペラ座附属図書館、シネマテーク・ド・ラ・ダンス

内容報告

1. 調査の目的

本調査の目的は、シャンゼリゼ・バレエ団の発表作品や動向を当時のプログラムや新聞・雑誌の批評や評価、関連する文献・映像資料の収集と閲覧をすることであった。これらの調査は、筆者の博士論文執筆において必須、かつ大変重要な調査である。

第2次大戦直後のフランスのネオ・クラシックダンス（モダン・バレエ）の中心は、シャンゼリゼ・バレエ団 *Les Ballets des Champs-Élysées* (1945-1951) であった。同バレエ団は戦後のフランスを代表するバレエ団でありローラン・プティの原点であるが、ほぼ研究されてこなかった。

ローラン・プティにとって最初のバレエ団でもあるシャンゼリゼ・バレエ団は、若手バレエ・ダンサーと一流の芸術家達が革新的な振付、そして人間味を持つ作品を次々に創作し発表した。今回の調査は特に同バレエ団誕生の契機と初期の活動をプティの振付作品に注目し、考察するために必須のことであった。

特に、筆者はバレエ団結成の契機となり、後にバレエ団の代表的作品であり続け、現在でも再演され続けているプティの振付作品《旅芸人》*Les Forains*、《ランデブー》*Le Rendez-vous* を中心に調査をすることとした。

貴重な一次資料であるバレエ団の日誌やプログラム、そして映像を閲覧することは、明らかにされていない同バレエ団の全貌、実態や発表作品を把握出来ると考えられる。以上の資料は日本国内のみならず、インターネット上でも閲覧不可能な貴重な資料である。パリ・オペラ座附属図書館、またシネマテーク・ド・ラ・ダンスでしか所有していない資料も多い。日本にバレエシャンゼリゼ・バレエ団の資料はほとんど存在せず、フランスに足を運び、映像を確認し、文献を収集・調査することは筆者の研究においては不可欠であった。

2. 調査施設

2.1 パリ・オペラ座附属図書館／フランス国立図書館

2.1.1 シャンゼリゼ・バレエ団と「舞踊のタベ」のプログラムの閲覧

パリ・オペラ座附属図書館 (Bibliothèque-Musée de l'Opéra National de Paris) は国立図書館の一部でもあり、オペラ座内にあるオペラやバレエ、音楽関連の資料を収める図書館である。所蔵資料をパソコン等検索機で検索することは未だに出来ず、昔ながらのカード式で探し、司書の方に依頼して、資料を運んで来てもらう。すなわち、所蔵資料は、現地に行かないと把握出来ないものである。

この附属図書館は、シャンゼリゼ・バレエ団の全プログラムを保管しているわけではないが、7年間の活動中の14冊を保管していた。しかし、バレエ史研究においては、バレエ団のダンサーの写真やレパートリー作品の紹介が掲載されている、しっかりとした厚紙のプログラムのみの調査では調査とは言えない。公演日や毎日の演目、出演者を記してある紙切れ一枚のハウス・プログラム(encarts)の方がより重要となる。そのハウス・プログラムも多く保管しており、全て書き写し、貴重な閲覧となった。そのハウス・プログラムの閲覧により、多くのことが把握出来た。以下、パリ・オペラ座附属図書館に保管されているハウス・プログラムから得た公演日程の調査を列举する。

まず、最初のシーズンは、1945年10月12～30日(31日というデータもある)。第2シーズンの1946年3月2～19日。また、好評を博した1946年4月(アデルフィ劇場 *Adelphi Theatre*)と10月(オペラハウス *Opera House*)に行ったロンドン公演のプログラムもあった。しかし、46年から毎

年盛んに行っていた国内外へのツアーに関するプログラム類に関しては、残念ながら上記のイギリス以外は所蔵されていなかった。

1946年6月の第3シーズンのハウス・プログラムも所蔵されていなかった。他に所蔵されていたハウス・プログラムは、1946年8月の公演、そして1946年12月19～30日の公演。1947年は1月1～22日、11月12～16日、18～23日。1948年は11月27～12月6日。1949年は4月19～22日。1950年は11月9～15日（以上全てシャンゼリゼ劇場 Theatre de Champs –Élysées）。1951年は10月3～7日、29、31日（いずれもエンパイア劇場 Theatre de L'Empire）であった。

以上、プログラムとハウス・プログラムから得た情報をもとに、今後バレエ団の年表を作成する予定である。

また、このバレエ団のプログラムのために寄せられた当時第一級のレベルで活躍していた作家や役者などの言葉は、このバレエ団が当時芸術界においてどのような位置を占め、意味を持っていたかについて理解出来る手掛かりとなり、新聞・雑誌の批評同様に研究において非常に貴重となった。

さらに、同バレエ団においては、《旅芸人》の公演回数が非常に多く、1948年12月3日には、250回記念公演の記録もあった¹。いかにこの作品を大事にしていたかが明らかとなった。

他に、シャンゼリゼ・バレエ団の前身であるリサイタルのプログラムも何点か閲覧することが出来た。これらリサイタル公演の出演者や作品の詳細はどの文献にも見られなかったため、貴重な資料となった。

シャンゼリゼ・バレエ団の前身のリサイタルであった、「舞踊のリサイタル」(Recital de Danse) 1943年4月15日(サル・プレイエル Salle Pleyel)、「舞踊の夕べ」(Soiree de la Danse) 1944年12月22日、1945年6月(サラ・ベルナール劇場 Theatre Sarah Bernhardt)のプログラムも閲覧した。その中には、ローラン・プティとジャニース・シャラが二人で振付・出演した作品が多く、また、パリ・オペラ座バレエ学校の生徒達による作品発表もあり、興味深い調査となった。

2.1.2 バレエ団に関する新聞・雑誌記事の閲覧、コピー

一次資料の中でも非常に重要となる、バレエ団の公演の当時の新聞・雑誌の批評記事をオペラ座図書館は非常に多く所蔵していた。それらを手に取ることが出来たことは本当に貴重な体験であった。しかし、保管していた人が図書館に寄贈したという可能性が高く、簡単なスクラップ集となっているために署名や引用元がわからない記事も多い。

滞在中に読み切ることが不可能だったが、この資料に関してはコピー依頼をすることができたため、全てをコピーして持ち帰ることが出来た。その資料の一つには、「「シャンゼリゼ・バレエ団で踊っていた」というのは、今日ではディアギレフの「バレエ・リュスで踊っていた」と言っているかのようだ」(Yves-BONNAT, *Les Ballets des Champs –Élysées-des Souvenirs et des projets, Le Reme de la Danse no.2, 1947*) と、バレエ団の当時のバレエ界での存在の大きさを物語るコメントも見られた。

作品別にも閲覧、コピー依頼をすることができ、《ランデブー》の批評文も多かった。今後全てを読み、分析してゆく。

今回の調査中、非常に残念だったことの一つに、フランス国立図書館内のアート&スペクタクル部門内に所蔵されているロンデル・コレクション内にあるはずのシャンゼリゼ・バレエ団の当時の日誌の閲覧が叶わなかったことである。ロンデル・コレクションは存在し、バレエに関する資料を多く保存しているが、シャンゼリゼ・バレエ団についての資料は見当たらないと言われてしまった。何度も図書館に通い、オペラ座図書館の数人の司書の方とも交渉を重ねたが、データ上にないと言う。ただし、親切な司書の方が様々な方面に電話をかけて調べてくれてわかったことは、過去に一度、シャンゼリゼ・バレエ団の展覧会を開催することになり準備を進めていたのに、展覧会の直前になってプティが取りやめたという情報を得た。その展覧会の準備のための資料の一部が、バレエ団の当時の日誌だったのだろう、ということまではわかったのだがそれ以上は情報を得られず、司書の方も「奇妙なことだ」と語っていた。筆者が参考にした論文内の著者の書き間違いという可能性もあり得る。その確認もかねて、次回の調査への宿題となってしまった。

2.2 シネマテーク・ド・ラ・ダンス

シネマテーク・ド・ラ・ダンス (Cinémathèque de la Danse) では、主に3点の映像資料を閲覧することが出来た。プティの振付作品《旅芸人》(Yves-Andre Hubert, 1966, 20min)、バレエ団のプリンシパルダンサーであったジャン・バビレの特集映像 *Babillee '91* (William Krein)、また戦後周辺のシャンゼリゼ・バレエ団に関するドキュメンタリー映像, *Naissance des Ballets des Champs –Élysées* (シャンゼリゼ・バレエ団の誕生) (Claire Sombert, 1989, 30min) を閲覧した。

《旅芸人》の全編を閲覧出来たということは非常に貴重な体験であった。この映像はプティが1948年に結成したバレエ・ド・パリ (Les Ballets de Paris) のダンサー達が踊り、また衣裳もイヴ・サン・ローランが担当をしたため、初演の時とは多少異なると言える(初演から20年後であるから当然だ

ろう)。しかし、この作品の評価を読んでいただけではわからない、作品の「哀愁、物悲しさ」、またプティ振付のアクロバティック性や魅力を十分に感じることが可能となった。アンリ・ソーゲがこのバレエ作品のために作曲した音楽であるため、全てのシーンが音楽によって切り替わり、7 部構成となっていたことがわかった。

小さなサーカス団がゆっくりとした足取りで下を向いてある街にやってくる。荷を解き、準備や稽古をし、舞台上に小さなカーテン付きの舞台が完成する。そうして本番となり、街の少年や見物人がちらほらと現れる。少女やピエロ、双生児の少女やハトの手品、ダンス、アクロバティックな見せ物などのシーンが次々にある。そうして見物人たちからお金を集めようとするのだが、客たちは支払いもせず帰っていき、一団は落ち込む。暗い雰囲気の中で皆後片付けと着替えをし、荷を荷台にのせ、また重々しく寂しげに街を去って、次の街へと旅立つ。

これらの物語が非常に魅力的に構成されており、評価されていた「哀愁、物悲しさ」そのものであることが理解できた。次々に見せ物が変わり、観客はその演技にも魅了され、また、物語全体に漂う切なさがこの作品が観客を惹き付けて止まない理由だったのではないだろうか。

ドキュメンタリー「シャンゼリゼ・バレエ団の誕生」は、誕生に関わったイレヌ・リドヴァ、アンリ・ソーゲ、そしてジャン・バビレへのインタビューと、当時の戦後のパリの様子とバレエ団の人気を写真や映像で構成した映像であった。「集まったダンサーも芸術家も、皆若く美しかった」などと語るリドヴァの言葉からは、バレエ団に関わる全ての人達が新作創作への熱意を持ち、活気に満ち満ちていたこと、さらには当時のバレエ団の人気を知ることが出来た。

3. ローラン・プティのセレモニーへの参列

ローラン・プティは今年の7月10日にジュネーブで87歳にして亡くなった。偶然にも、筆者の調査研究期間中の9月23日にパリ市内のサン・ロッシュ教会でプティ氏の追悼セレモニーがあり、参列する機会に恵まれた。

カメラやビデオ撮影禁止の荘厳の雰囲気の中で、《若者と死》に使用されている楽曲であるバッハの「パッサカリア」(Passacaille B.W.V.582)がパイプオルガンで演奏されてセレモニーが開始された。プティ氏の長年のバレエ界における功績が司祭によって語られ、友人達が追悼の意を表し、短いセレモニーであった。参列者にはプティの妻、ジジ・ジャンメールや近親者、プティと深い繋がりを持つパリ・オペラ座バレエ団のバレエ・ダンサーや元バレエ・ダンサーを始めとして、スペイン、イタリアからなど、世界的スター・ダンサー達、そして関係者、筆者のような者たちがいた。

プティは死の直前まで世界中のバレエ団に振付指導を続けていた。また、世界中のダンサー達がプティの作品を踊りたいと渴望している。プティ自身の魅力や才能に合わせ、才能ある芸術家達に囲まれていたことを実感した日となった。

また、筆者の滞在中に刊行されていたヨーロッパ圏内の舞踊関連雑誌のほとんどが、ローラン・プティ追悼特集をしていた。それら全てが筆者の研究に非常に有効な資料となった。

4. 考察

ローラン・プティは1940年にパリ・オペラ座に入団後、舞踊批評家のイレヌ・リドヴァによって、当時天才少女ダンサーとして名を馳せたジャンヌ・シャラのパートナーとして選ばれた。2人はオペラ座外でのリサイタルで作品を発表し始めた。

1944年、リドヴァがリサイタル「舞踊の夕べ」を主催した。そこで2人を含めたオペラ座を飛び出した若く才能のあるダンサー達、ジャン・バビレやルネ・ジャンメール(後のジジ・ジャンメール)らが踊り、バレエ愛好家や知識人の間で話題となった。45年、ディアギレフの秘書、そして台本家、照明家でもあったボリス・コフノがプティに《旅芸人》の振付を提案した。オペラ座を退団したプティは父親の資金援助を得て《旅芸人》を上演し、成功を収める。この作品では、衣裳や美術、装飾をクリスチャン・ベラルが担当した。哀愁に満ち、かつアクロバティックな振付のこの作品に観客は魅了された。批評家達はこの作品を絶賛し、《旅芸人》は戦後最初の価値ある作品として位置づけられた。

プティは古典の伝統を継承するだけではなく、時代を反映したテーマ、そして共同作業者を選んだ。また観客とのコミュニケーションも重要だと考えていた。

《ランデブー》では、ジャック・プレヴェールが台本、アンリ・ソーゲが作曲をそれぞれ担当し、またピカソがドロップカーテンを描き、写真家ブラッサイが美術を担当した。

1945年10月、支配人のロジェ・ウッドにより、シャンゼリゼ劇場がプティらに提供され、シャンゼリゼ・バレエ団が設立される。コフノが芸術監督、弱冠21歳のプティがメートル・ド・バレエ、振付家兼ダンサーとなった。プティは上記3作品の他に《草上の昼食》*Déjeuner sur l'herbe*、《悪魔

の花嫁》*La Fiancée du diable* (1945)、《ジュピターの恋》*Les Amours de Jupiter*、《洗濯女の舞踏会》*Le Bal des blanchisseuses* (1946)《13の踊り》*Treize danses* (1947)を振付けし、意欲的に作品を発表し続けた。

シャンゼリゼ・バレエ団の発表する新作では、シャラ振付の《カード遊び》*Jeu de cartes* (1945)などコミカルな作品も人気を得たが、作家のエルザ・トリオレは同バレエ団の発表する新作の特徴を次のようにうまく言い当てている。

「人間的なものである・・・テーマそのものが変化している。ダンスそのものへの動機が変わっている。日々の生活によってすり切れた上着がダンスに入り始めた。綺麗なピンクのタイツやクラシックシューズは続いているけれども。おとぎ話は様相を一変させ、貧困、運命、困難なことについてのダンスに変わった」² (筆者拙訳)。

トリオレが指摘する「貧困、運命、困難」という表現は、《旅芸人》《ランデブー》《若者と死》に最も当てはまるだろう。

舞踊批評家のアントワーン・リビオが、当時のバレエ団の公演は「舞踊が中心になり、観客参加の印象を与える公演」³であったと位置づけている点は注目に値する。このことは、当時を振り返りコフノらが自らのバレエ団を皆が家族のような集団であったと思い出していることと無縁ではないと考える。後期バレエ・リュスに集結した一流の芸術家達による台本や音楽、衣裳や装置のデザインを目の当たりにして、オペラ座出身の勢いのあるダンサーや新たな発想を持ちつつあった振付家集団には、これで第2次世界大戦を乗り越えられるという一種の連帯感があつたに違いない。戦争で厳しい生活を強いられていた観客は新鮮、かつシックで悲哀に満ちたバレエに惹き付けられ、新鮮なコミュニケーションをさえそこに見出したと言える。それ故に、シャンゼリゼ・バレエ団は第2次世界大戦後フランス・バレエの出発を担った存在であったと言えよう。

5. 今後の研究へ

以上のように、本調査は10日間という短期間ではあつたが充実したものとなった。このように、バレエ団や振付家や作品の研究を文献のみで行うのではなく、一次資料である、当時のプログラムや雑誌、新聞記事を確認、また映像で確認し、一つのバレエ団の調査を通して戦後フランスの舞踊界を考察する、ひいては社会や舞踊を考察する、という研究は舞踊学という枠に収まらない研究であり、本調査はグローバルな広い視野での先進的な調査研究であったと考える。

シャンゼリゼ・バレエ団についてはいまだ研究がなされていないため、筆者の学位論文での主要テーマとなる。本調査の主題であった研究は恐らく学位論文(博士論文)執筆の第1、2章をしめるであろう。シャンゼリゼ・バレエ団が他の芸術やその後続く舞踊に与えた影響は計り知れないものがある。

今後も引き続き、今回の調査研究で得たシャンゼリゼ・バレエ団について、また同バレエ団に属していた時代にプティが振付けをした重要な作品の資料の読み込み、分析を通し、戦後のフランスの舞踊の動向や社会的背景を導き出し、舞踊史におけるそれらの位置を考察する。

今回の調査に基づき、今年度の12月3日には第63回舞踊学会大会にてシャンゼリゼ・バレエ団の初期の活動やその意味をテーマに研究発表することが決定している。

注

1. 1951年11月27日にはローザンヌにて449回目のバレエ団としては最後の《旅芸人》の公演を行っている。Christout, Marie-François(2004)*Les Ballets des Champs-Élysées :A Legendary Adventure*,Dance Chronicle, Vol,27 :190.
2. *Les Ballets des Champs-Élysées 1946*, Ed.Aljanvic,1946,Paris. (バレエ団のプログラム)
3. アントワーン・リビオ (前田充訳)『モーリス・ベジャール—現代バレエの精髓』(西田書店、1978)。

参考文献

- Aschengreen,Erik: Tr. to English by Patricia Mcandrew and Per Avsum (1986) *Jean Cocteau and the Dance*.Gyldendal: Copenhagen.
- Beaumont,Cyril(1954) *Ballets of Today*. Putnam and Co:London.
- Craig-Raymond,Peter(1953) *Roland Petit*.Losely Hurst:Surbiton, Surrey.
- Crosland,Margaret(1957) *Ballet Carnival*.Arco :London.
- Haskell,Arnold.L(1950) *Baron at the ballet*.Collins:London.
- Ries,FrankW.D(1986) *The Dance Theatre of Jean Cocteau*. UMI Research Press: Michigan.
- Boll,André(1956) *Jean Babilée*.Robert Laffont:Paris.

- Clair Sarah(1995) *Jean Babilée ou la danse buissonnière*. Van Dieren :Paris.
- Christout, Marie-François(2004) *Les Ballets des Champs-Élysées :A Legendary Adventure*, Dance Chronicle, Vol, 27 :157-198.
- Fiette Alexandre(Ed.)(2007a) *Roland Petit à l'opéra de Paris : Un patrimoine pour la danse*. Opéra national de Paris:Somogy éditions d'art:Paris.
- Fiette Alexandre(Ed.)(2007b) *Zizi Jeanmaire Roland Petit : Un patrimoine pour la danse*. Opéra national de Paris:Somogy éditions d'art:Paris.
- Kochno, Boris(1954) *Le ballet*. avec la collaboration de MariaLuz, Hachette:Paris.Koeing,
- John Franklin(1980) *Le Danse contemporaine*. Fayard: Paris.
- Lidova, Irène(1956) *Roland Petit*. Robert Laffont:Paris.
- Lidova, Irène(1969) *Roland Petit*. Sodal:Paris.
- Mannoni, Gérard(1984) *Roland Petit-Ouvrage conçu et réalisé*. L'avant-scéné Ballet/ Danse:Paris.
- Mannoni, Gérard(1992) *Roland Petit:Un Choreographe et ses danseurs*. Paris.
- Michaut, Pierre(1950) *Le ballet contemporain 1929-1950*. Plon:Paris.
- Minyama, Philippe(1998) *Jean Babilée*. Marval:Paris.Pastori,
- Jean-Pierre(1997) *La danse, des Ballets russes à l'avant-garde*. Gallimard:Paris.
- Petit, Roland(2003) *Roland Petit:rythme de vie:entretiens avec Jean-Pierre Pastori*. La Bibliothèque des Arts:Lausanne.
- Petit, Roland(1993) *J'ai dansé sur les flots*. Grasset :Paris.
- Schneider, Marcel, Michel, Marcelle, Robin, Jean(1983) *Danse à Paris-Ballets des Champs-Élysées Festival international*. Dell'arte:Paris.Williamson, Audrey(1958) *Ballet of 3 decades*. Rockliff:London.

Program

- Soirée de Ballets* Ed.Chêne.06.1945 :Paris.
- Les Ballets des Champs-Élysées* Ed.Mercure.12.10.1945:Paris.
- Les Ballets des Champs-Élysées* Ed.Mercure.17.03.1946:Paris.
- Les Ballets des Champs-Élysées*1946 Ed.Mercure.05.04.1946:Paris.
- Les Ballets des Champs-Élysées*1946 Ed. Aljanvic.1946:Paris
- Les Ballets des Champs-Élysées*1946-1947 Ed.Aljanvic.19.12.1946:Paris.
- Les Ballets des Champs-Élysées*1948 Ed.Mercure.06.11.1948:Paris.
- Les Ballets des Champs-Élysées*1949 Ed.Mercure.19.04.1949:Paris.
- Les Ballets des Champs-Élysées 1949-50* Ed.Mercure.7.11.1949:Paris.
- Les Ballets des Champs-Élysées* Ed.Mercure.12.06.1950:Paris.
- Les Ballets des Champs-Élysées*1951 Ed. Mercure.3.10.1951:Paris
- Ballet de L'opéra Picasso et la danse* 1993 :Paris.
- Ballet de L'opéra Roland Petit* 9.2010:Paris.

ふかさわ なつみ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

深澤南土実さんの海外調査研究では、1.フランス国立図書館におけるロンデル・コレクション内にあるシャンゼリゼ・バレエ団の当時の日誌閲覧、2.パリ・オペラ座附属図書館におけるシャンゼリゼ・バレエ団当時のプログラム閲覧、3.シネマティーク・ドゥ・ラ・ダンスにおける現在でも再演されている作品《ランデブー》《旅芸人》の映像の閲覧、を通してフランスのネオ・クラシックダンス（モダン・バレエ）の中心であった当時のシャンゼリゼ・バレエ団の誕生の契機と初期の活動を探ることが主な目的であった。このような調査により日本では得られない貴重な情報を収集できたことは、博士論文の執筆に関して非常に有益な収穫であったと考える。また、この時期に渡欧したことによって、深澤さんの研究対象でもある亡くなったローラン・プティ氏のセレモニーに参列できたことも研究の大きな励みになったと思われる。今回の調査結果は、12月に開催される第63回舞踊学会大会で発表を予定している。さらに、研究を進め深化させることを期待している。

（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科（文化科学系）・猪崎弥生）